

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第四十六卷「社会科学（二の六）」

個人・自然人と国家内思想的結束人間集団・共同体（宗教団体、思想
団体、政党、政治団体、暴力団、人権団体、女性団体、LGBT団体、
人工言語共同体）

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第四十六巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、個人・自然人と国家内思想的結束人間集団・共同体（宗教団体、思想団体、政党、政治団体、暴力団、人権団体、女性団体、LGBT団体、人工言語共同体）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 女性による女性疎外

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 女性による女性疎外

二〇一〇年七月十六日 起筆、攔筆、公開

僕は、文字や音などに色が見える共感覚や、女性の排卵や月経を遠くから感知できる共感覚を告白し、大学の研究者にまで自分の体験を語ったり体験記録を持参するようになって、特に後者の共感覚に関連して、逆にそこで出会った女子学生さんたちやDV被害女性との交流をはじめ、十代・二十代女性の性の悩みに触れ、勉強させていただく機会が増えた。

そして、性的トラウマ・性的被害によって重度の解離性障害や対人恐怖症を引き起こした女性のご意見に触れる機会も増えた。

知能が「女兒退行」を引き起こした女性もいるため、普通に言葉のやり取りをすることさえ難しいこともあるが、僕としては、その恋愛観・結婚観を、差し支えない程度に聞かせてもらってきた。

性的な問題を抱えた女性たちの中には、「将来一緒になれるたった一人の理想の男性」を誰よりも求めていると言うにもかかわらず、「結婚」という概念を嫌ったり怖がったりする女性たちが、一定の割合いる。僕が話を聞いてみるに、あまり分類するのはどうかと思うが、次の三点のいずれか、または全てが、彼女たちの心にある気が

がする。

●結婚が「長期売春契約」であることへの恐怖

●結婚が「国家・公的機関への性行為相手の登録」であることへの反発

●結婚が「女としての恥じらいの放棄になる可能性」への不安

僕が感じたことは、彼女たちはマルクス主義さえ超えた「日本女性特有の穏やかなアナーキスト（無政府主義者）」だということだった。順番に、この女性たちの主張をまとめて文章にしてみた。

●結婚が「長期売春契約」であることへの恐怖

「男性と結婚することは、その男性と長期に渡る売買春の契約を結ぶことであり、私は体を売りたいわけではないから、結婚という決まりはいらぬ。性に奔放な周りの女性とうまく折り合っていないようなこんな私が大好きになる男性も、きつと私を買いたいのではなく、本能的に守りたいと思う男性のはずだ。頑張って働いてくれている男性に夜に自分の体を提供するという当たり前のことが、紙切れがないとできない女性のために、結婚はあるんだと思う。だから、実は私がなりたいのは、“愛する一人の男性にとって最高の娼婦”なのであり、“最高の娼婦”になりたい女は、結婚という長期売

春契約を拒否するはずだ」

▲結婚が契約であることは言うまでもないが、さらに結婚を一種の売春と見なす考え方は、結婚制度を使わずに「真の娼婦」になるべきが女だという考え方は、何もこの女性たちだけの「異様な結婚観」ではなく、ニーチェ・キルケゴール・デリダなど過去の哲学者にも見られる。

むしろ、この女性たちの「結婚回避」は、「私は結婚しなくても、たった一人の理想の内縁の夫だけに心身を捧げる」という固い決意と表裏一体で、彼女たちは「契約の紙切れの有無」が自分の気持ちに影響しないことを知っている。

●結婚が「国家・公的機関への性行為相手の登録」であることへの反発

「私が将来、誰かと結婚したら、その男性は国家や地方公共団体に、私の性行為相手として正式に把握されることになる。私だって、同じく把握される。自分たちが属する国家・公的機関の男性と女性たちに、私たちの性的関係の存在は把握される。それは結婚相手に迷惑ではないだろうか。私が愛する男性は、私がそんなことになるのを喜ぶような人だろうか。きっと違う。私はそんな人は選びたくないし、そうはならないと思う。その男性と私とが本当に愛し合うに

は、結婚制度を回避して、内縁でなければならない。内縁であることによつてしか、私たちの愛は国家を超越することができない」

▲これは、女性たち自身は気づいていないだろうけれども、病院にかかれば妄想性の人格障害や統合失調症と判断される一歩手前の状態であり（僕は「あなたたちは正常な女性だ」とだけ言つて、通院の勧めなど毛頭しない主義だが）、僕の考えでは、「国（くに）」というものが日本人にとつて「国家」ではなく「ムラ社会的共同体」であつた時代への回帰願望だと思う。

日本が近代的な「国家」ではなかつた時代には、自分たちの愛の上に立つ権力なんてものはなかつた。江戸期の幕藩体制でさえ、相對死の流行に脅かされた。今や、自分が愛する男性の仕事や生き方をコントロールする「主権国家」なんて超越概念があることが悔しくてたまらない。だから、自分が属する国家の「結婚制度」をあえて外れて「内縁」に徹することが真の愛だ、という考えになつていく。

また、僕が自分の持つ「女性の性周期を察知できる共感覚」と付き合うのに反面教師的に一通り見てきたマルクス主義界限においては、今でも「女性の公有」というものが、盲点でありながらも議論されることがある。「女性公有化」の発想は、マルクス主義者たちの絶望から来ていると思うが、上記の女性たちは、マルクス主義をさえ通り越した「優秀なアナキスト」であると僕は思う。「私が愛する理想の男性の上に立つ国家などあるはずもない」という彼女たち

の「真剣な妄想」は、僕にとつては「正常な日本女性に特有の感性が一気に発散されたにすぎぬもの」に思える。

●結婚が「女としての恥じらいの放棄になる可能性」への反発

「私たち女性というものは、私は誰と性行為をしています、なんてことは公に語ってはいけない。そんなことは語らないという恥じらいがないといけない。結婚するということは、それを周りの知人や隣近所に、無言にして一気にしゃべると同じことになる。だから、私のように、自分が周りの女性以上に遠慮がちで、人付き合いが苦手で、控えめな女性だと知っている女性は、結婚せずに大好きな一人の男性と性行為していけるような人生を送ったほうが、自分の性格に合っていて、幸せかもしれない。今の日本女性の多くにとつて、結婚とは、一見すると収まりの良い言葉に聞こえるけれど、それまでに何人か付き合つて性行為してみた男性との関係を帳消しにするための言い訳がほんの少しでも入っているのだとしたら、私が結婚するということは、私にも過去に結婚相手以外との性行為体験があったと勘違いされる要因にもなりかねない。だから、現代日本において真に家庭的な女は、結婚に向いていない」

▲これは何人かの解離性障害の女性に共通していた主張をまとめたものだが、これこそ、「一部の日本女性の疎外感」を端的に表している

と思う。解離性障害の女性は、自らの運命を呪って同性攻撃に走るのではなく、むしろ周囲の同性に対する無批判を保ち、淡々と社会を分析した結果として心身に防衛態勢を張っている場合が実際はほとんどである。稀に、単一の自我による防御能力を大幅に超える社会的外圧・心的外傷を受けると、解離性同一性障害を引き起こす。先の「私の性格に合っていて、幸せかもしれない」「勘違いされる要因にもなりかねない」という言い回しにも、「攻撃性」よりは「人柄の良さ」が感じられる。

◆一つ気づいたことは、今現在、鬱や対人恐怖や強迫性障害にかかっている若い日本の女性には、「周りの女性との性觀念の違いによる焦燥感・圧迫感・絶望感」を持っている女性も多いということだった。女性の社会進出が叫ばれる中、女性どうしの性觀念格差もかなり広がっているようである。

周りの人たちにとっては他人事、ささいなことだと感じられることについても大変な深さで悩んでいる女性は、それなりにいるということだと思ふ。そして、その当初の悩み自体は、異性である男性から見ても大変に美しいものだと思えていたものが、あまりに悩みすぎると、自分だけが時代にそぐわない女性なのではないかという錯覚や妄想に陥り、なかなか気分の回復が難しいところまで行き着いてしまうようである。

例えば、僕のところに来た質問で、「私の大学の親友が、バイトで

水着になったり、少し脱いだりして、写真まで撮られてきました。それで私はめまいがして倒れそうになりました。世に自分の水着姿を売る、自分の裸を売る、というのが、今の女性の普通の感覚で、私のほうがおかしいのでしょうか？」というものがある。

もうこれだけで、この女性にとってみれば、自分以外の女性全員が親友のようなタイプの女性に見えてしまうのだと思う。ただし、親友のことが本当に好きだったからこそ生じた衝撃や悩みであることは、間違いないと思う。

それに、このような質問は、「本当の質問」でもあるだろうが、「私のほうがおかしくない女性だと言ってほしい」という願望から出た質問でもあると共に、「私は親友みたいな女性にはならない」という意思表示を誰かに同意してほしいという願望から出た質問でもあると思う。こういうことについて、かえって同性よりも異性に相談しやすいと感じる女性もいるようである。

この後、この女性が親友との関係をどうするかといったことは、どうしてもこの女性自身が頑張って考える以外にないと思うのだ。どこからどこまでを「普通一般の女性の常識・社会通念」と呼ぶかによっても違ってくるけれども、悩みの主たる要因が「性的なこと」である場合を今は考えたい。

女性による女性の性的疎外、つまり、「私ばかりが周りの女性から取り残されている。でも、やっぱり私は周りの女性の性観念についていけない」という感覚を覚える女性について、僕は社会的見地からも非常に關心を持って見ている。「私ばかりが」という部分は確

かに思い込みすぎかもしれないが、「取り残されている。ついて行けない」という感覚は、「取り残されたくない。ついて行きたい」という心境ではなく、「取り残され、ついて行けないと、女性として生きる意味がないのだろうか」という心境である限り、その女性個人の問題として終わらせるわけにはいかないからだ。

そして、こういう不安を抱える女性に話をよくよく聞いてみると、男性だけではなく、女性の友人や同僚からも、「あんたは彼氏もいないし、男性経験もなさそうだし、ホントにつまらない女だね」などといった言葉の暴力、セクハラ、パワハラを受けている女性が少なくない。

「男性が女性を解離性障害などの症状に陥らせる」のはいとも簡単で、性的暴力がその主たる方法に当たり、多発していることは確かだが、実は「女性が女性を精神疾患に陥らせる」陰湿ないじめ、セクハラ、パワハラなども進行しているというのも、また現実なのだと思う。

自分が原因で生じたのではない（同性からの威圧によって感じざるを得なくなった）性的な悩み自体が鬱や対人恐怖や強迫性障害や解離性障害の主たる要因になっている女性が、表に出ない形で確実にいるということ、しっかりと心に留めておきたいと思う。

このような神経症的な症状に陥っている女性に対してとるべき姿勢とは、「目の前の女性の症状を治して、“正常な”女性に戻してやる」という姿勢ではなくて、「目の前の女性が鬱や対人恐怖症や強迫性障害であることは、それ自体が“人間的な人間”であることの一

つの証であり、話は思いきり聞いてあげる」という姿勢ではないかと思う。

昨日は久々に東大に行って、自分の感覚や自閉症観・精神病理観などについて話をしてきた。プレゼンではなく、先生との対談のよ
うな形になったが。途中、女性の体の状態（排卵、生理など）を察
知することがある僕の共感覚の話から、エロティシズムとは何か、
自己と他者とは何かについて、哲学的な議論になったのが面白かつ
た。